

ジャック・デリダの困難な倫理：正義の受苦的情動について

東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程：中間 統彦

ジャック・デリダの後期思想において、正義や倫理に関する一連の問いは、多くの注目を集めると同時に、後に続く紛糾した議論を呼んだ。後期デリダ思想の全貌は、彼の死後、講義録などの刊行もあり、徐々にその全体像が明かされつつある。しかし、その研究や解釈については、いまだに絶え間ない議論が続いていると言っ

てよいだろう。事実、著名なデリダ研究者たちのあいだでも、後期デリダ思想の真価を巡る対立は随所にみられる。例えば、後期デリダ研究が盛んな米国では、マーティン・ヘグルンドが『ラディカル無神論』において、宗教的デリダの解釈者であるジョン・D・カプートを徹底的に批判し、後に両者のあいだで論争が生じた。「ラディカル無神論（ヘグルンド）」vs「ラディカル有神論（カプート）」の論争である。その他にも、南アフリカのデリダ研究者のあいだで、アパルトヘイトや法学を巡るデリダ的な「法/正義」解釈について対立が存在する。日本において、これらの論争はほとんど注目されていないが、これらは後期デリダ研究における重要な一側面であり、デリダ的な倫理と正義の困難さを示している。

そこで本発表では、後期デリダ思想に対して倫理的主体の受苦＝情熱(*passion*)に注目することで、改めて、正義と倫理の問いの一側面に光を当てることを目指す。本発表において、我々が注目するのは、デリダのカント解釈である。これは先に言及したデリダ研究者たちの対立の根本に横たわっているものであり、カントに対する脱構築的読解の過程をたどり直すことで、デリダの「正義」や「倫理」を巡る解釈の源泉を明らかにすることができるだろう。

勿論、先に挙げた研究以外にも、デリダのカント解釈についての先行研究は散見される。しかし、そのほとんどが法/正義の区分や両者の構造分析に終始しており、デリダが、カントを論じる際に注目するもうひとつの側面、倫理的判断における「厳命」や「尊敬」、「感嘆」といった情動的側面をとり逃している。デリダは、カフカやベンヤミン、マンデラについて言及することによって、法/正義の先行判断に伴う非-身体的情動ともいえる次元を指摘する。本発表では、先行研究において読み落とされがちな情動的次元に着目することによって、デリダのカント解釈の特異性を捉えることを試みる。

具体的には、次のような読解を行う。まず、一九八〇年代以後に発表・公刊された著作（「法の前で」、『法の力』など）において展開されている、デリダの法/正義の構造的分析を確認した後で、法/正義の先行判断に関する情動的語彙（「厳命」、「感嘆」、「尊敬」）が、どのように扱われているのかを明晰にする。これらの情動的語彙は、単に法/正義の区分によって要請されているのではなく、デリダとユダヤ＝キリスト教的伝統の関係を端的に示すものでもある。次に、それらの問いが、カフカ論において展開される法概念といかなる関係にあるのかを検討し、最終的に後期デリダ思想のうちに絶え間なく流れているカント思想の批判的相続の過程を描出する。